

子ども達と墨流しを行って

川里 智子 (近畿大学九州短期大学)

Making Suminagashi (marbling) Art with Children

Tomoko Kawazato (Kyushu Junior College of Kindai University)

要旨

2021 年から「墨流しを用いた作品制作」について研究を行ってきたが、この度園児に対して研究実践を行うことができたのでここで報告する。墨流しの実技体験を園児に対して実施した結果、広がる模様を不思議そうに眺める様子や、楽しみながら模様を作り出す姿が見られた。自らが施した模様から発想して描いた作品からは、おばけや人、へびを描いている園児が多く見られた。模様の形や色彩から、自分なりに見立てた事柄を描きこむことで、想像力豊かに表現された作品が多数見られた。

キーワード：墨流し，園児，想像，形や色彩

Abstract

Research on “Creating Artwork Using the Suminagashi (marbling) Technique” has been conducted since 2021. This time we have implemented research practice on preschoolers and the results are outlined in this report. As a result of carrying out the Suminagashi practice experience on preschoolers, we were able to observe their gazing intently with awe at the design in front of them and joyfully creating patterns. From the patterns that were formed, many children imagined and came up with artwork featuring ghosts, people and snakes. From the shapes and colors of the pattern, they used their artistic interpretation to create their own images and many drawings manifesting their vivid imaginations.

Keywords : Suminagashi, Preschoolers, Imagination, shapes and colors

1. はじめに

筆者は 2021 年から 2024 年にかけて「墨流しを用いた作品制作」について研究を行ってきた。絵画技法である「墨流し」を研究対象にした理由は、自身が日本画を制作していることもあり、その際使用する画材として「墨」があり、その墨を生かして作品制作ができないかと思ひ、墨流しを行いその墨流しの模様や色彩から発想したものを描かせることを考え実践してきた。

2023 年の研究結果から『①模様があることで (白紙よりも) 想像が広がり普段思いつかないような表現に繋がること ②模様から「海」を想像し、実際に描いたものは「魚類」が多数いて海の生物を絵に

描いている人が多かった ③ (墨流しの) 模様の形から想像し関連したもの (植物のつる) を描き、形に添って絵を描いていることも多く見られた』¹などが分かった。この研究は高校生と大学生にむけて行ってきたのだが、2023 年のポスター発表¹をきっかけに、園児たちに対して研究実践することを提案された為、2024 年 7 月に園児に対して研究実践を行った。本報告では園児が墨流しを体験した様子と、その模様から何を想像して何を描くのか園児の発言や完成作品から調査する。

2. 研究実践について

1) 墨流しを用いた絵画制作

① 研究実践園について

子ども達と墨流しを行って

今回協力を仰いだ園は福岡県久留米市にある巨瀬川幼稚園で、近くに耳納連山を望む緑豊かな場所にある。未満児クラスの12名、年少クラスの23名、年中クラス17名、年長クラス27名で合計79名を対象とした。実施日は2024年7月9日と12日で、9日の10時から11時までを年中クラス、11時から12時まで年長クラスで研究実践をした。12日の10時10分から11時まで未満児クラス、11時10分から12時まで年少クラスで研究実践をした。

②実践内容

まず筆者が保育者となり、園児の前で保育内容を説明した。初めて目にする先生で驚いている園児の緊張をほぐすため、手作りの紙芝居を使い、墨流しについての話をした。紙芝居の中には墨流しのやり方や、墨流しの模様がどのように見えたかなど、問題形式にしてコミュニケーションを取りながら行った。

実践内容は次の通りだ。

1. 最初に紙芝居を使い、墨流しの体験方法について説明する。次に墨流しの模様から色々な事を想像して、更に絵を描くことができると伝えた。
2. 筆者が実技の実演をし、1人1人サポートしながら墨流しの体験を行った。
3. 待っている園児は、筆者が事前に墨流しを施した障子紙に、水性ペンやクレヨンを使って思い思いに描いていた。(未満児クラスの園児たちは白い画用紙を使用して、思い思いに描いていた)

③実践のために使用した材料について

画用紙(八つ切り)79枚、墨汁(墨運堂 墨汁 墨の精 水墨画用 No31)、食器用洗剤、新聞紙、綿棒、バッド、障子紙(使いやすいようにカットして事前に墨流しを施したもの)、ペットボトルのキャップ、水性ペン、クレヨン。

墨流しの模様を写すための紙は画用紙を使用している。障子紙は墨流しの模様を施したものを園児の人数分事前に準備した。この障子紙は他の園児が実技体験を行っている間にペンやクレヨンを使って絵を描くために使用した。障子紙は1度水に浸すと乾くのにかかる。すぐに墨流しを施した紙で絵を描きたい場合は画用紙を使用するのをおすすめする。

墨汁についてだが、なんでもいいわけではない。

今回は画用紙で体験をしたのだが、画用紙に対してきちんと模様が付くのが先ほど紹介した「墨の精 水墨画用 No31」である。墨汁の種類によっては、画用紙に定着せずに線がはっきりとしないものもあるので、一度実際に墨汁を使って試してほしい。食器用洗剤は20:1(水20:洗剤1)程度にする。洗剤をそのまま使用すると水全体に油が回り、墨が付かなくなるので注意が必要だ。ペットボトルのキャップには墨と洗剤を入れる。綿棒にそれぞれの液体を付けて実技をする。

2) 墨流しの実技体験について

墨流しとは、墨と油を使い水面を利用して模様を作り出し、紙に映し取る技法である。手順として

1. バットに水を入れて墨と洗剤(油)を交互に付けて模様を水面上に作る。
2. 画用紙(障子紙など)を静かに水面に置き、ゆっくりと引き上げ準備しておいた新聞紙の上に置く。
3. 表面の汚れを新聞紙で取り、乾かせて完成である。

最初に未満児クラスの実技体験から報告する。未満児クラスに入室した際、不安そうな表情の園児もいた。見知らぬ人が入って来て怖かったのだろう。説明が終わった後、墨流しの実技を行った。綿棒に墨や洗剤を自分で付けれる園児もいたが、付けることができない園児は、手を取って(筆者と)一緒に行った。綿棒に墨を付け水面に模様を作った。墨が水面で広がっている様子を不思議そうに眺めていた。また洗剤を水面に付けると弾いて透明な模様が広がる様子を興味深く眺めていた。「広がったね」や「もう一回やりたい」などの言葉が聞かれた。墨流しの仕上げとして息を吹きかけて模様を作る場面では、吹きかける息の勢いが弱かった事で思い通りの模様ができなかったことがあった。未満児クラスでは、水面に綿棒を入れて、模様を直接変化させるほうがよいと感じた。

図1は墨流しを施した画用紙を並べて鑑賞している様子である。「A君の墨流しかっこいい形だね」や「Bちゃんの模様素敵だね」など保育者が声掛けをすることで園児の注目が画用紙に集まり、自分の作品の良さを再発見することができた。またお友達作品の良さに触れることができ、同時に同じ模様の作品はないことにも気付いてくれるといいなど

心の中で考えた。



図1 未満児クラス 鑑賞している様子

次に年少クラスについて説明する。墨流しの説明が終わった後、すぐに「私も墨流しをやってみよう」という印象を受け好感触であった。説明の間も発表をたくさんしてくれて、色々な想像が子ども達の頭の中で駆け巡っているのだと思われた。実技では一緒に手を取り進める園児もいれば、自分で作業をする園児も半数程見受けられた。心を躍らせ、水面の上で行われている現象に見入っている様子が見られた。未満児クラスと同じように「まだ墨流ししたい」と声をかけられ、嬉しく感じた。

最後に年中クラスと年長クラスについて説明する。2クラスとも、自分から綿棒に墨をつけて、筆者の手を園児の手に沿えなくても模様を作り出すことができる園児がほとんどであった。最後に息を吹きかける場面では息の勢いもあり、墨流し特有のジグザグ模様ができ、園児もいた。図2は年長クラスの男児が、画用紙に模様を映している場面だ。映し取った模様を見た瞬間に「わあ！」と感動する言葉がよく聞かれた。



図2 年長クラス 模様を映し取っている所

3. 結果

1) 年少クラスの完成作品から

年少クラス在籍 23 名に対して画用紙作品 22 名の作品を調査対象としている。この後紹介する、他のクラスも同様で、園児が墨流し体験をしている間に描いている障子紙作品は調査を除外している。描画材料はクレヨンを使用している。調査を行って分かった事を説明する。

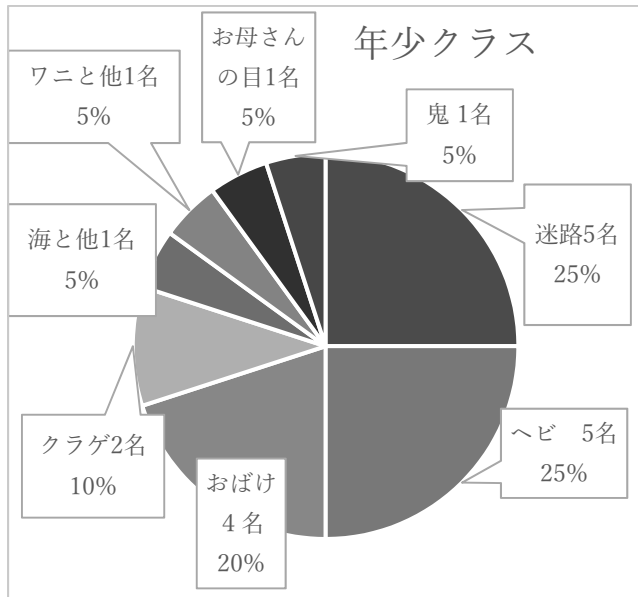
1 番多く描かれていたのは、迷路の 5 名 (25%) とへび 5 名 (25%) であった。(グラフ 1)

2 番目に多く描かれていたのは、おぼけで 4 名であった。おぼけが多く見られたのは、筆者が説明の際にみせた手作り紙芝居の中におぼけが登場した為、影響を受け「私もおぼけ描いて見たいな」と考え描いた園児もいるのかもしれない。ただその影響はなく、形や色彩からおぼけを想像して描いている園児もいると思われる。

3 番目に多く見られたのは、クラゲの 2 名であった。このクラゲも手作り紙芝居の中に登場する。

最後に 1 名のみが描いたものを紹介する。カエル、おこりんぼ鬼、道路、お母さんの目、カブトムシ、海、タコ、ワニ、雲であった。カエル、カブトムシ、海、タコ、雲などは、夏を感じることができる事柄で、体験した季節が夏なので、体感などから想像して描いているのだと思われる。描かれたものをグループ分けしてみた。迷路や道路の道系統が 6 名と多い。動物 (へび、蛙、カブトムシ、タコ、ワニ) として分けると 11 名と最多となった。

子ども達と墨流しを行って



グラフ 1 年少クラス（何を描いたのか）

次に描かれた作品について説明をする。図 3 は園児作品「めいろ」だ。墨流し模様の複雑な曲線に添って赤い線をクレヨンで描いている。この模様は狙ってはできない形で複雑な形だが、園児はその形を楽しむように模様に沿って線を描いている。

年少クラスでは、22名の園児が25の事柄を想像して描いたことが分かった。

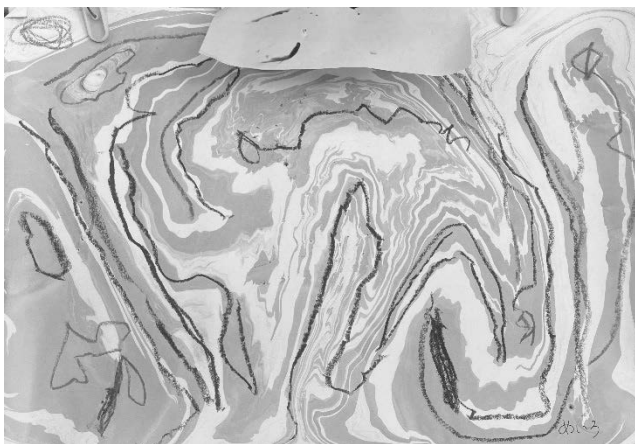


図 3 年少園児作品「めいろ」

2) 年中クラスの完成作品から

年中クラスは、在籍17名に対して墨流しを施した画用紙に、水性ペンやクレヨンを使用して描いた作品15枚を調査した。(障子紙作品は今回の調査には入っていない)

1番多く描かれていたのは、人で7名(29%)だった。(先生、人、怒っている人、パン屋) (グラフ2) 図4には人とパン屋が描かれている。画面中央に描かれている人はお買い物に来ているお客さんであると思われる、お店の中にいる人がパン屋さんだと思われる。

2番目に多く描かれたのは、タコで4名が描いた。

3番目に多く描かれたのは、記号のハートとウサギで3名がそれぞれ描いた。

4番目に多く描かれたのは、虹で2名が描いた。

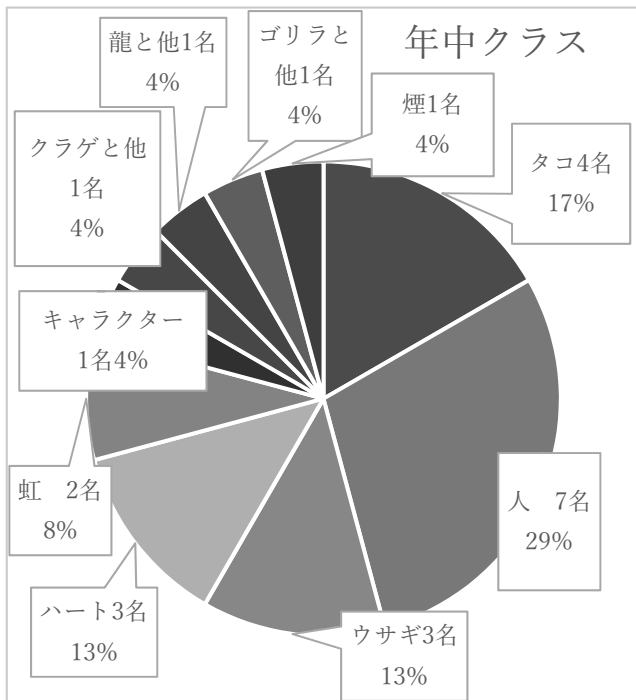
最後に1名のみが描いたものを紹介する。ヘビの抜け殻、バナナ、サメ、クラゲ、家、アニメーションのキャラクター、バッグ、妖怪、迷路、にわとり、チューリップ、大きいゴリラ、パンを焼いて煙が出ているところ、ラクダ、犬、ハリネズミ、おたまじゃくし、恐竜、龍であった。

グループ分けをすると、動物(タコ、ウサギ、サメ、クラゲ、ニワトリ、ゴリラ、ラクダ、犬、ハリネズミ、おたまじゃくし、恐竜、龍)が18の事柄があり最多であった。海に関するもの(タコ、サメ、クラゲ)は6の事柄があった。

図4の園児作品について説明をする。お店の煙突から出ている楕円形の重なりは煙であろうか。ゆらゆらと煙が浮かんでいる様子が表現できている。墨流しの技法は古く日本の平安時代からあり、その模様の意味は当時2種類しかなかったようだ。1つは風に吹かれた白い布が流れるように旗めく模様と、もう1つは野山に立ち上がる煙がゆるやかに流れる模様²であった。後半の意味で「煙がゆるやかに流れる模様」の煙の部分に園児との共通点を感じた。立ち上がる煙の種類は違うが、当時の人たちの墨流しの模様に対する意識(野山の煙)と園児の見立て(パン屋の煙突から出る煙)が似ていることが分かった。

年中クラスでは、15名の園児が41の事柄を想像して描いたことが分かった。

子ども達と墨流しを行って



グラフ 2 年中クラス (何を描いたのか)



図 4 年中園児作品 「パン屋さんがパンを焼いて煙が出ている所」

3) 年長クラスの完成作品から

年長クラスは、在籍 27 名に対して墨流しを施した画用紙に、水性ペンやクレヨンを使用して描いた作品 25 枚について調査した。(障子紙作品は今回の調査には入っていない)

1 番多く描かれていたのは、火で 7 名 (23%) が描いた。(炎、焚火、火の玉) 図 5 の園児作品を見てほしい。画面下の中心に描かれているのが火だ。模様自体が炎の形のように膨らんでいるように見

えることから (模様の) 形から想像して描いたのだと考えられる。オレンジ色が中心に塗られ、その周りに赤色を塗っている。実際の火をよく観察して描いていることがこの絵から分かった。

2 番目に多く描かれたのは、龍で 6 名が描いていた。図 5 にも描かれている。

3 番目に多く描かれたのは、おばけとくじらと恐竜でそれぞれ 4 名が描いていた。図 5 にも画面左に恐竜が描かれている。

4 番目に多く描かれたのは、月で 3 名が描いている。

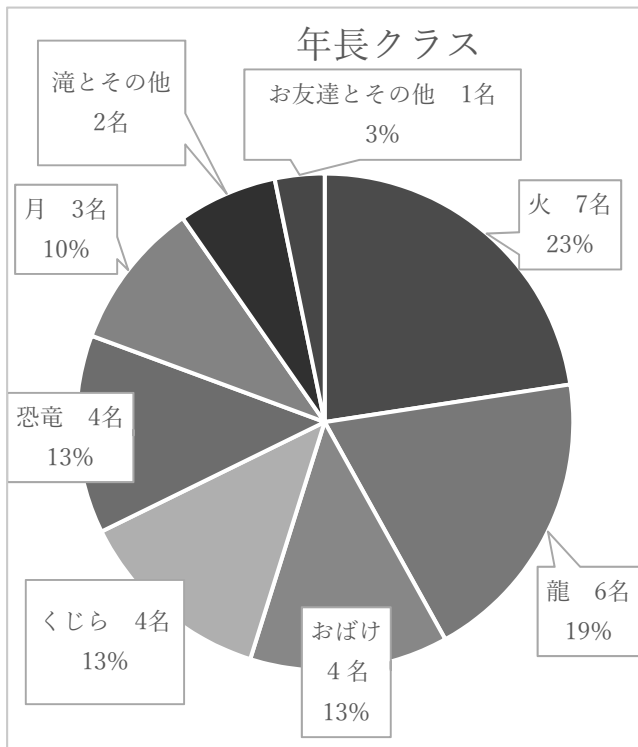
5 番目に多く描かれたのはワニ、キリン、隕石、滝、虹、波、リス、ヘビ、ウサギ、狼で 2 名が描いている。キリンや隕石や虹は図 5 にも描かれている。

最後に 1 名のみが描いたものを紹介する。溶岩、みのむし、木、UF0、お友達、海、カツオ、バッタ、魔女、スライム、山、竜巻、猫、墨、イカ、ペンギン、夕陽、迷路、池、ゲームのキャラクター、グルグルキャンディー、雷、クラゲ、恐竜、怪獣、サメ、アシカ、イルカ、スプーン、亀、クマ、アヒル、ハート、足の裏、ハンマー、犬であった。

グループ分けをすると動物 (龍、くじら、ワニ、キリン、リス、ヘビ、ウサギ、狼、みのむし、カツオなど) の数が 1 番多く 41 の事柄を確認することができた。宇宙や天体に関する事柄 (隕石、UF0、月、竜巻、夕陽、雷、虹) も 9 の事柄を確認することができた。

年長クラスになると様々なことを日々体験し、経験する事が増えたことで描かれる事柄が増え、内容にも変化があるのだと思われる。

子ども達と墨流しを行って



グラフ 3 年長クラス (何を描いたのか)

図 5 の園児作品は描かれている事柄も多くて目を引く作品だが、多くの作品が模様の形に添って描かれているのが分かるだろうか。麒麟の目や模様を描きこむことで段々と麒麟に見えてくる。次に画面左上の恐竜も目や舌を描きこむことで自然と恐竜に見えてくる。紹介した作品や他の園児の作品を見ていると園児の豊かな想像力に引き込まれて目を奪われた。

年長クラスでは、25名の園児が84の事柄を想像して描いたことが分かった。

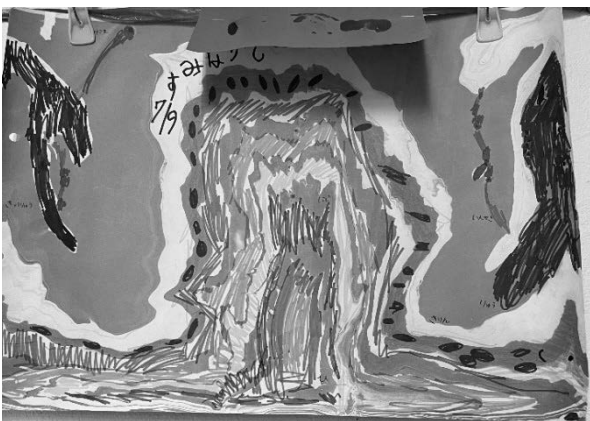


図 5 年長園児作品「火・虹・麒麟・龍・隕石・火の玉・恐竜」

4. おわりに

年少クラスでは(22名の園児が)25の事柄を画用紙の中に描き、年中クラスでは(15名の園児が)41の事柄を描き、年長クラスでは(25名の園児が)84の事柄を描いたことが分かった。年齢が上がるにつれて描く事柄が増えている。年長クラスの園児は、年少クラスの園児のおよそ3倍の事柄を描いている。年少クラスの作品は1人の園児が作品の中に1~2の事柄を描いているのに比べて、年長クラスは1人の園児が作品の中に平均3の事柄を描いていることが分かった。これらの事から、年齢が上がるにつれて園児の環境も幅広くなり、経験した事も増えたことで、様々な事柄を想像して描くことができたのではないかと推測する。

次に墨流しの模様がどのように園児に影響したのかまとめてみる。墨流しの形に添って描いている園児もいたり、また形に関係なく描いている園児もいて、自分が描きたいものを描いている園児もいた。完成作品から分析した結果、墨流しの模様の形を生かして絵を描いた園児の数は46名(73%)であった。全対象者は63名である。次に形は関係なく描いた園児は16名(27%)であった。これらことから、墨流しの模様(形)から想像して描いている園児の割合が多いということが分かった。ここで形とは関係なく描いた園児の作品についてだが、形に添って描いてないから問題があるというわけではない。自ら施した模様から何らかの影響は少なからずもあると思われる。お絵描き自体を楽しんでもらうのが本研究の目的なのである。

図6は年中園児が描いた「おおきなごりら」だ。画面いっぱい大きく描き、両手を広げているゴリラを表現している。このゴリラは曲線に沿って青と黒の水性ペンで塗っている。墨流しの偶然できた形を自分なりに生かして描いている。ゴリラの目や口を描くことで生き生きとした様子が表現できている。

子ども達と墨流しを行って



図6 年中園児作品 「おおきいごりら」

これまでにはクラスごとに調査したが、最後に全クラスまとめて墨流しを施した画用紙に何を描いたのかまとめてみた。

1番多かったのは、おばけで8名であった。2番目は人とヘビでそれぞれ7名であった。3番目は龍で6名であった。これらのことから、おばけが最も描かれた事柄だと分かった。墨流しの色彩は無彩色であり、曲線が複雑に組み合わせられている。無彩色の色調と曲線から発想しておばけを描いたのではないと思われる。また季節や気温も影響していると考察する。(図7)



図7 年少園児作品 「おばけ」

改善点として、未満児クラスの最後の仕上げに息を吹きかけて模様を作っていく場面で、吹きかける息の量が少なくうまく模様ができなかった事があった。今後未満児クラスと年少クラスで実技を行う場合は、模様を付けるための棒（綿棒など）を準備し、手で模様を付けていく等対処したい。

謝辞

最後に本研究にご協力頂きました学校法人光琳学園 巨瀬川幼稚園の職員の皆様と園児の皆様、誠にありがとうございました。

文献

- (1) 川里智子「令和5年度(2023)日本教育学会全国美術部門協議会 第62回大学美術教育学会 香川大会 [大会案内 研究発表概要集]」 2023 p64
- (2) 貴田庄「マーブル染」2001 p78